

新制岩手中学と

岩手高校の誕生

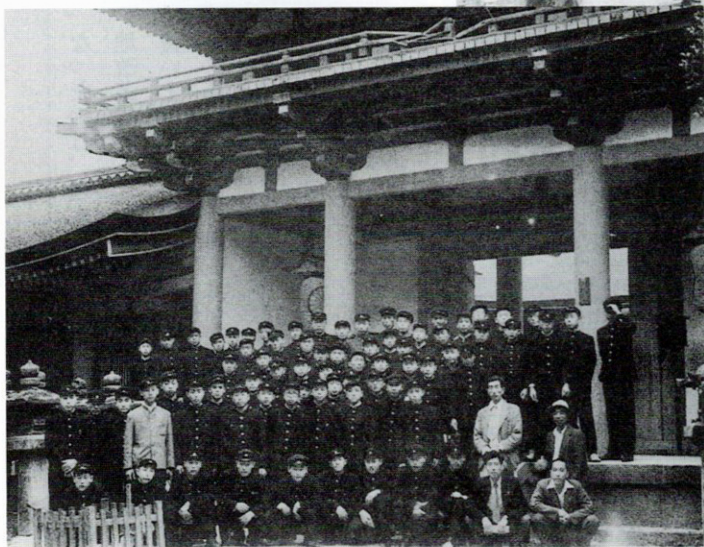
昭和二年一月三日に公布され、翌二年五月三日から施行された「日本国憲法」の精神に基づき、教育の分野でも改革が行なわれた。すなわち、昭和二年三月三十一日に「教育基本法」と「学校教育法」が公布・即日施行され、これによって小学校六年間・中学校三年間の義務教育が発足、さらに高等学校三年間・大学四年間の学校体系が整えられた。いわゆる六・三・三・四制の誕生である。

私立中学として二〇余年の伝統を持つ岩手中学も、新しい学校制度にのっとった変革を余儀なくされた。まず昭和二年三月二七日に新制の岩手中学校への移行を申請し、同年四月の新学期から義務教育としての中学教育が始まった。また翌二三年の二月二六日には岩手高等学校の設立を申請、三月一九日に認可された。

こうして昭和二三年度の新学期には、新制の岩手中学校と岩手高等学校の両校が揃った。いっ



文化祭の展示(昭和27年)



修学旅行 春日神社で
(昭和27年)

ばう、昭和二二年春に各市町村が慌ただしく新設した公立新制中学校の多くは、施設の面でも職員に関しても、極めて不十分な状態で発足せざるをえなかった。したがって、これに比べる旧制中学の伝統を持つ本校は遙かに恵まれた立場にあり、事実上六年間の一貫教育を旧制以来の施設と職員で比較的円滑に行なえる体制が備わったのである。

中学進学生を持つ県内各地の父母の間に、子供を地元の急造公立中学校に行かせるよりも、むしろ伝統があり態勢の整っている岩手中学に入れたという気持ちが生じたのは当然だった。昭和二二年度から数年間、岩手中学への入学志望者が殺到するという現象が見られたのである。昭和二二年には定員一〇〇名に対し応募者が二四九名に達し、入試の結果一一〇名だけが合格した。二三年には定員一〇〇名に対してじつに

二九四名が応募し、うち一二七名だけが合格している。

その生徒たちが岩手中学・岩手高校の六年間一貫教育を受けて高校三年生になったのは昭和二七年以降だが、彼らの多くが東大・京大・東北大をはじめとする国立大学、また早稲田・慶応をはじめとする一流私立大学に合格し、岩高の名を天下にとどろかした。一貫教育の長所が遺憾なく発揮された時期だったのである。

ここで学校を経営という経済的側面から見れば、昭和二〇年代は昭和六、七年の金融恐慌のころと並んで本校のもっとも苦しい時期であった。

敗戦後の日本の政治は連合国最高司令官の管理下に置かれたが、その占領政策は、財閥解体、農地改革、労働三法の制定を三本の柱としていた。なかでも岩手奨学会にとって大きな打撃と

なったのは、地主的土地所有の撤廃をめざす農地改革である。所有地を国家によって強制的に買い上げられ、奨学会の資産は減少して本校の経営基盤が大きく揺さぶられた。くわえてインフレーションの激化が事態をいっそう難しくした。昭和二〇年代に授業料その他の値上げ申請が何度も出されていることから、当時の経営の苦難がしのばれる。

しかし、三田義一理事長はよく難局に対処し、岩手中・高等学校の崩壊を防いだ。そればかりか、苦難の時期にもかかわらず、後に述べるように昭和二六年には創立二五周年記念式典を盛大に挙行し、その記念事業として昭和二九年には石桜図書館を竣工させた。

そのような努力があつたればこそ、苦境を乗り越えるにとどまらず昭和三〇年代からの雄躍期を迎えることができたのである。